

■24年3月24日 第26回 み言葉の分かち合い

●主のエルサレム入城 マルコ 11・1～10

イエスが子ロバを選んだ理由

- ① 「エルサレムよ、歓呼せよ。見よ、お前の王がお前の所に来られる。……柔和で、ろばに乗って来られる。」(ゼカリヤ書9章9節) この預言の成就。
- ② 貧しい人たちの交通手段である子ロバは、神の国での価値観を教えています。弟子が子ロバを借りる際にイエスが教えられたことは、他者への配慮。ロバの使用を許可したのは、神への愛からでしょう。道に自分の服を敷き、野原から葉の付いた枝を道に敷いたのは、エルサレムに王が入る為の儀式的な行為で、古代の東洋においても王が入城する際に行われた儀式に由来します。

民衆は「ホサナ (どうか救いたまえ)」と歓呼の声をあげてエルサレムに入ったのは、イエスをメシア (救い主) としての歓迎を現しています。

●第1朗読 イザヤ書 50・4～7 (第1イザヤ：1～39章、第2イザヤ：40～55章、第3イザヤ：56～66章)

ここは第2イザヤの箇所、「主の僕の歌」の3番目となり、イエスの受難と復活についての重要なところです。

イエスは、神の助を確信しており、恥じることなく、受難と十字架に向かう決意が表現されています。

●第2朗読 フィリピ書 2・6～11

イエスは神の子であるにもかかわらず、人間の姿となって現れ、自分を無にしてへりくだり、人としての道を歩まれ、神には死にいたるまで従順でした。よって神より栄光を受け、全ての者がイエスの前にひざまずき、神が讃えられました。

●福音書朗読 マルコ 15・1～39

受難の朗読は、福音書の朗読の中では最も重要で、朗読の役割を分担したのは、イエスの受難を再現しようとしたためです。

当時のローマ総督であるピラトが、イエスに死刑を執行しました。イエスの罪状は反逆罪。これは律法学者やパリサイ派の人たちが、ローマの直轄地において、イエスがユダヤ人の王と名乗ったとされたからです。十字架刑は最も残虐な刑で、ローマ市民には適用外とされていました。

イエスに紫の服を着せたのは、王の服に似せるためです。茨の冠は、嘲りのためと考えられました。「服を分け合った」のは、「着物を分け 衣を取ろうとしてくじを引く。」(詩編 22・19) とあるからです。イエスが、「エロイ……と叫ばれた。」のは、「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜ、わたしを見捨てられたのですか。」(詩編 22・2) ここを引用されました。

「神殿の垂れ幕が裂かれた。」とあるのは、イエスの死により、神と人を隔てる物は無くなり、人と神とが直接繋がったことを象徴しています。

イエスは残虐な刑となりながら、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのか分からないのです」(ルカ 23・34) と、イエスが言われたので、「本当に、この人は神の子だった」と百人隊長が語ったのでしょう。